美術新報
第九卷
第八號

時言

## 今上半年の諸展覽會概觀（上）

本年の上半季と云へば、猶ほ一箇月を餘すと雖ども、最早や主もなる展覽會は殆ど既に開かれたりと見るも、差支なき實況なるを以て、茲に聊か所感を述ぶるも、甚しき早計にはあらざるべき歟。

文部省展覽會の秋季に開催せらるゝことゝなりて以來、主もなる私設展覽會の、多く春季に開かるゝに至りしは自然の勢と謂ふべし、獨り日本美術協會が、秋季に於て開かれんとするも、同會は參考品の最も觀るべくして、新作品は割合に世の注意を惹かざるが近年の傾向なれば、目下の處美術界の大勢外に立つの觀なきにあらず、されば今春既催の諸展覽會を概觀するは、即ち自ら現今美術界の一面を觀察することゝなるなり。

本年上半季の諸展覽會に於て、最も吾人の注意を惹きたるは無聲會の半切畫の試みなりき、そは單に半切畫なりしが故にあらず、柏亭、百穗、素明諸氏が新しき趣味と素養と觀察とを以て日本畫風の上に試みたる新意が、陳腐停滯の惰氣を打破すべき前驅となりしとの爲なり、而して吾人は豫て、將來の畫界に於ては、必ずや洋風畫の智識的基礎を有する者の新機運を開くべきを信じたりしことが、漸く實現せられんとするを愉快に感じたり、此點に於ては春草大觀諸氏の裝飾畫風は其趣味を發揮する所に於て、確かに一種の境地を開拓せんとするを認むるも、其智識的基礎の猶ほ薄弱なるが如く見ゆるを以て、今の處果して那邊にまで發展すべきやを豫想し得ざること、今春の巽畫會、東京展覽會幷に大觀展覽會の出品に於て、之れを見たり。

二葉會、讀畫會其他の展覽會に於て一部の作者が今猶ほ徒らに洋風畫法の皮相を摸するもの尠からず、其愚嗤ふべきも、是亦時勢の要求を表明する一證となすべし。

# 白馬會と太平洋畫會の展覽會

## 白馬會展覽會所觀

坂井犀水

今年の白馬會展覽會は出品總數六百六拾餘點、會場狹き爲め陳列が稍窮窟に感ぜられるが、兎にも角にも青年畫家の如何に多數に、如何に元氣に滿ちて居るかを證明して居るところが頼もしい、今から兩三年以前であつたならば、斯んなことは、とても企て得られなかつたであらう。

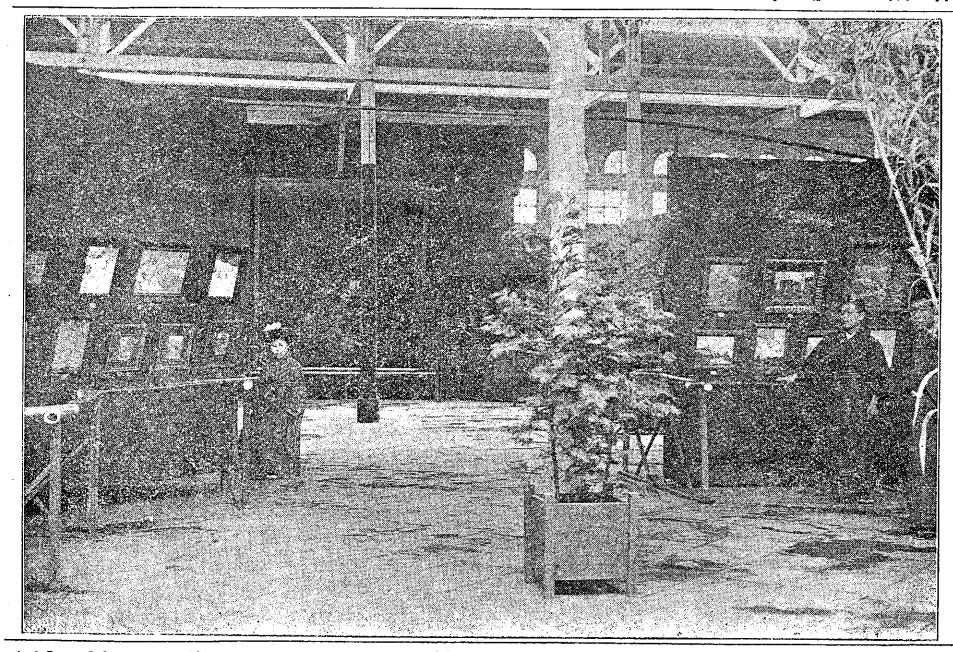
今年の同會展覽會の中心と見るべきは、言ふまでもなく、新歸朝の藤島、湯淺兩君の作と、其齎らし歸られたる參考品である。

藤島武二氏の滯歐紀念スケッチ貳拾七點、之は歐洲現今の新風潮を傳へたものであらう、幸に我洋畫界近年の進歩は、最早や海外の潮流が如何にあらうと、毫しも驚かぬまでにはなつて居るから、吾人の此等の作に對するときに、それが新歸朝者の作であると云ふことの爲めに、特にそれを買被ぶると云ふことはない、單に畫として之を鑒賞するのであるが、吾人は其豪宕なる筆致、其强烈なる色調、無造作に見ゆる場所の撰擇、そして其場所の撰擇が、特更に探がし當てたと云ふ風ではなく、或る場所に於ける或瞬時の自然の現象に、深き感興を催うして、其印象を描寫したと云ふ樣に感せられる、余は或意味に於て自然の最も新鮮なる印象若くは感興を傳ふるものは、巧に描かれたるスケッチであると信ずるものであるので、是等のスケッチを大に價値あるものとして鑒賞した。

斯う云ふ意味に於て湯淺一郎氏の作品の中では、油繪の公園數葉を最も面白く思ふ、湯淺氏の水彩畫十四點は南歐の熱烈なる日光の下に、西班牙の風景（內一點は婦人）を寫されたもので彼地の風物が斯うもあらうかと想像はすれども、未だ實地を踏まざる余には、稍單調に覺えられて、餘りに興味を感じ得ない、同氏の油繪人物數點の中『村娘』は西班牙畫風の力强き筆致と澁き色調と、そしてそれが湯淺氏其人の趣味と一致して居る樣なところが、最も多く味はれる。

前に言つたスケッチの趣味に於て、黑田清輝氏の『庭前の雪』『春の草原』『秋の色種』其他數點の小品に、淡雅な輕快な興趣の限りなきを覺える、摸擬し難き筆致の妙、企及し難き氣品の高雅、況んや正確なる技術の基礎の上に、それが發揮せられてあるので、一見他の後進諸氏のスケッチに比して甚しき逕庭なきが如くに見ゆるが、熟視之を賞翫するときに、作爲なく小巧を弄せざる處に自ら妙趣の伏在するを發見する、氏のパステル畫は『森の中』『水のほとり』など老練なる運筆を見る、岡田三郎助氏の畫稿は每時もの仕上げた畫とは趣を異にして居て面白い。

中澤弘光氏は昨年の『日ざかり』の强烈なる外光、『おもひで』の精緻なる光の研究とは、頗る別方面を試みて居る、今年の作品は『李花』の明快（『斜陽』は失敗と思ふ）の外、概して穩和なる色調を主として居る、『新綠』『奈良』其他も佳作ではあるが最も氏が得意の色調を以てして快きものは、餘り意を用ゐなかつたらしい『婦人』の小品である、山



白馬會展覽會場內の一部

『森の中』　黑田清輝筆

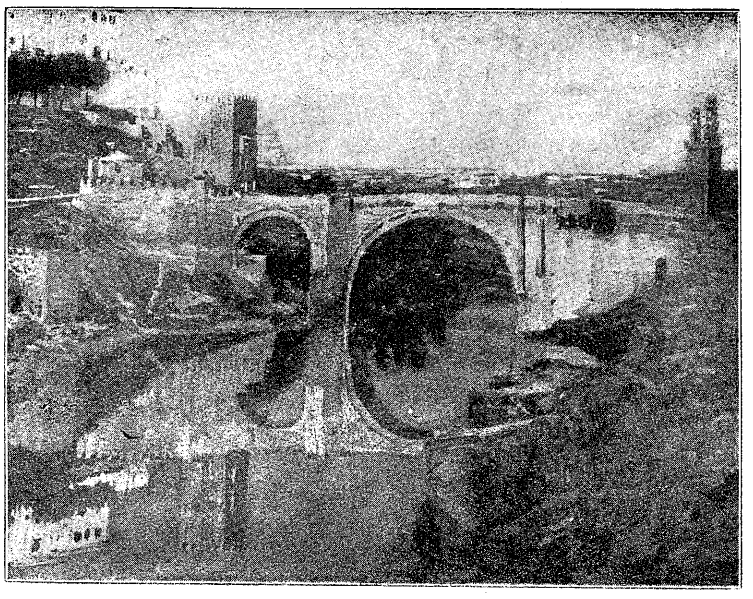
滯歐紀念スケッチ　藤島武二筆

本森之助氏の『夕凪』『漁火』共に努力を見るが、之を四分一位に縮少した方が却て味があらうと思はれる、矢張り『雨の山』が最も佳い、跡見泰氏の諸作は能く自然の優さしみを描がく、そして圖樣が氣が利いて居る、『入江』の如きが其の適例であらう、『泊船』は靜かな河流の氣持を表して居る、小林鍾吉氏の作では『初夏の堤』『みをつくし』を好む、岡野榮氏の富士亦佳し。

柳敬助氏の『雪の景』は特色のある作である、と云ふのは能く自然の印象を直寫して居るのと、何處となく其描寫に、我々に親たしい感を起させるものがあるからである、南薫造氏の水彩畫は我在來の畫風と異つて居る、總てが穩和で快い、矢崎千代治氏の『四條』は圖が面白い、此三氏も亦新歸朝者である。

長原孝太郎氏の『新聞紙』は眞面目な畫である、氏が研究的態度の堅實にして世の風潮を追はぬのは敬服であるが、吾人は氏に向つて更により大なる期待を有して居る、請ふ自重せよ、中村勝治郎氏は花卉に專門を定めたらしい、『殘菊』好し。

青年諸氏の進歩には年々驚かされる、前途の多望なること、古い言葉だが、春の海の如しとでも言はうか。



『アルカンタラ橋』　湯淺一郎筆

『少女』　岡田三郎助筆

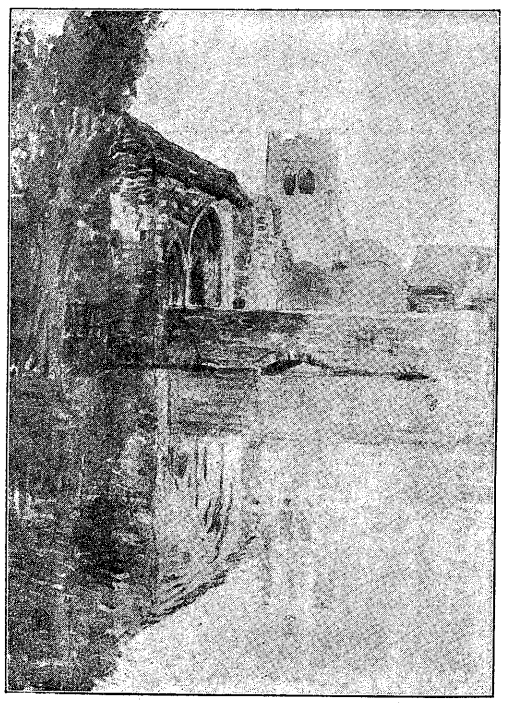
青山熊治氏の『アイヌ』は其努力の大なると、多少の微瑕はあつても、大體に於ける成功を認めねばならぬ、焚火を中心として、そが映射の面白みを描きたる構圖に無理なく、人物の表情態度も自然に近い、人は和田三造氏の『燁燻』に比して、作の前後を云々するが、余は作者が製作の興を實境に獲來りたる由を傳聞した。若し一歩を讓つて、假りに作者が『燁燻』を見て後、此圖を企てたとするも、摸倣剽竊にあらざる限り、斯の如きことは、作の成敗に何の關係があらうぞ。之は技術上多少未熟の點があつても、佳作の一に數へて宜からう。熊谷守一氏の『轢死』は餘りに闇きに失して、余は何等の感興をも覺えない。正宗得三郎氏の『落椿』は琅玕洞で見た方が佳かつた。

岡吉枝氏の『少女』は可憐な出來である、被服の色調に落付があつて優雅である。中野營三氏の『山路の夕』は和らかな色調と、穩やかな筆致に靜かな山村を想はしめ、『砂濱』は構圖に奇趣がある。山口亮一氏の『秋の日』は屋後を照らせる小春日和の温かさを寫し、『神戸オリエンタルホテル』は瀟洒なる描法、某大家は之を評して、フイスラーを偲ぶと謂つた。山脇信德氏の『午前』『雨の夕』は共に同一の場所に於て、自然の或る景象の特趣を研究せんとしたもので、モネあたりの研究法に倣ふたのと見える、前者の方が印象が深いと見える、後者は稍青色が勝ち過ぎたと思ふ。近藤重一氏の『雪の夕』は情致がある、筆致も佳い。小林眞二氏の『靜かな流』色調が少しく暗らいかと思ふが、靜かな穩やかな感じが佳い、『赤城街道の夕照』夕陽の華やかに映じたる山の描寫が快い、其他山形駒太郎氏の『朝凪』、岸田劉生氏の『雨』、香田勝太氏の『盤臺の魚』など數へ來れば際限もないが、紙面が許さぬから略する。

仔細に見來り見去れば青年畫家の技術の一般に進歩せることを認めざるを得ぬ。

參考室は洵に難有い、有益だ。湯淺氏摸寫のヴェラスケスの傑作、名だけ聞いて、未だ實物に接せざる我々には大なる敎訓を垂れる、『織女』『官女』の大作にも學ぶべきところは多いが、中にも『エソッポ』と『メニッポ』には限りなき意味を感得する、啻に古哲の性格、風采を傳へて遺憾なきのみならず、偉大なる藝術の力を、此摸寫を透して覺えることが出來るのを深く喜ぶ。藤島氏摸寫のシャヴアンヌ壁畫も亦面白い、之にも亦一種の強い力の籠つて居るの覺える。コランの素描は流石に練達の手腕を見る、コルモンの鉛筆スケッチも珍とすべきものである。

終りに、同會々員諸氏の暢ん氣な無頓着な畫家的態度が、何處となく此展覽會の上に現はれて居ることを言ひ落すことが出來ぬ。（五月二十日）



『ワルタムの古寺』　南薫造筆

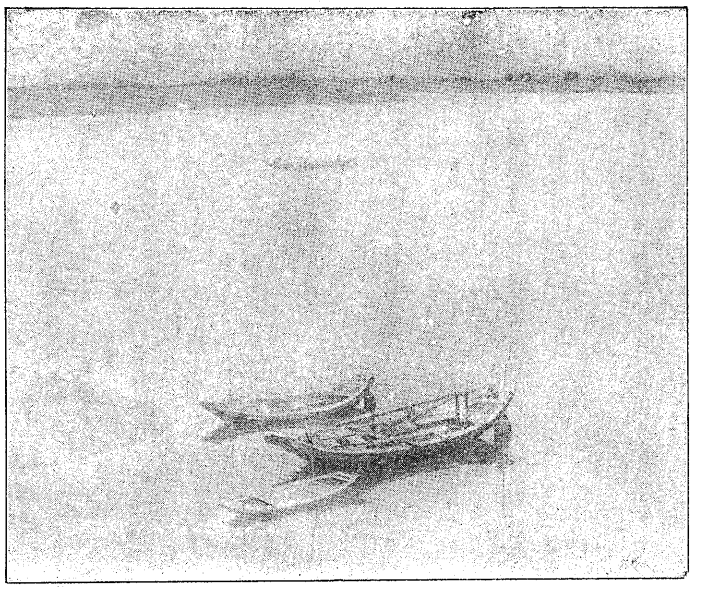
## 太平洋畫會所觀

同　人

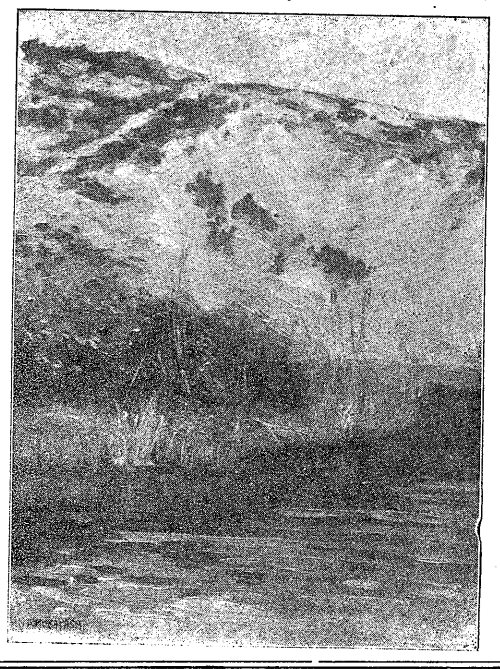
今年は白馬會と同時に開會するから、大に競爭しやうと云ふ意氣込だとは豫て會員某々氏から聞き及んで居たが、果して會員諸氏の努力は盛んなものである。出品も白馬會の餘りに多數なるに鑑みて、大に嚴選することになつたと、開會前に聞いたが、成る程陳列も頗る整つて居る。

入場先づ多數の水畫に眼を奪はれる、水畫は此會の特色と見られて居るだけあつて、佳作が少くない。

望月省三氏の『ゆく秋』は、場所の選み方が、佳い、うらさびしい心持が出て居る。夏目七策氏の靜物は筆が大きくて、それで能く物質の說明が描かれ



『泊船』　跡見泰筆



『初夏の堤』　小林鍾吉筆